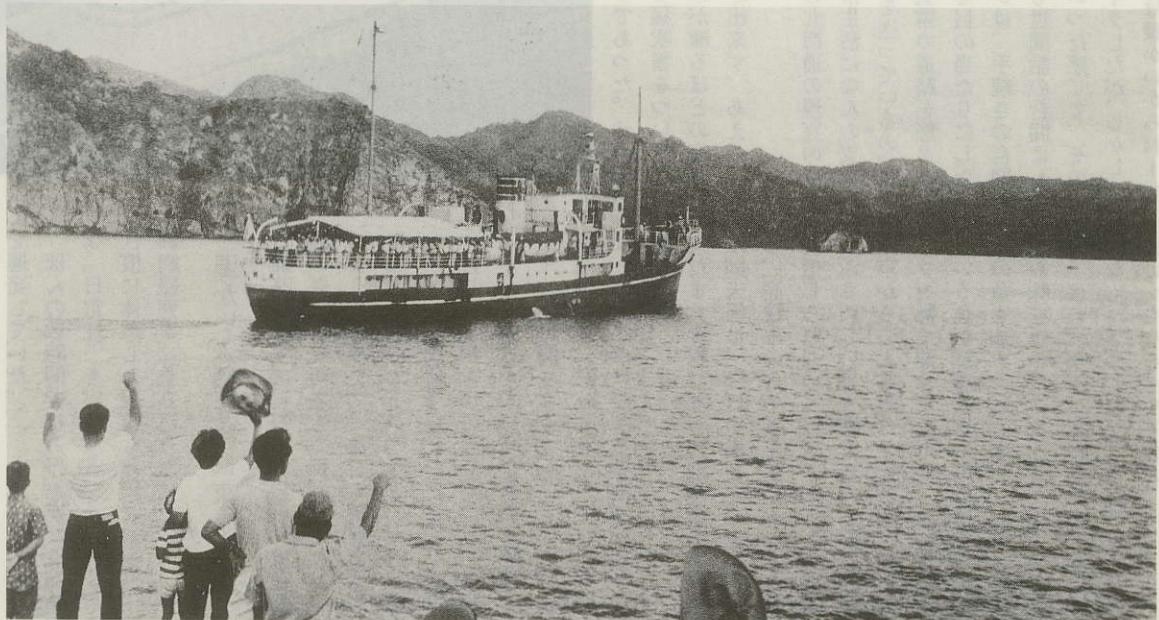


黒潮丸

《主要目》貨客船、東海汽船所属、496総トン、主機ディーゼル1基、
出力850馬力、航海速力11.5ノット、旅客定員101人、
1947年播磨造船所建造

戦後、八丈島航路と小笠原航路復興の パイオニアとして活躍



戦後の復興に貢献した「二十八隻組」

五十年配過ぎの読者だつたら、敗戦直後の鉄道の、あのすさまじい混乱と殺人的な混雑を覚えておられるだろう。

当時、国鉄をはじめとする各種の旅客輸送機関は、空襲などで大きなダメージを受け、日本列島は北は北海道から南は九州に至るまで輸送力が低下して、まさに氣息えんえんたる状態にあつたのである。加えて、軍人の復員、引揚者の帰国、疎開者の帰宅といった戦後処理要因による輸送需要の増大が、この混乱状態に追い討ちをかけた。

私事にわたるが、敗戦の年の秋、その当時小学生の筆者は、疎開先の大分から、それこそ死ぬ思いで東京へ帰ってきたことを記憶している。急行などはまだ走つていなかつたら、もちろん鈍行列車である。それもスシ詰めの超満員列車で、身動きひとつできないまま車中で二泊三日を過ごした。それは、今のが快適な新幹線の旅からは想像もつかないほどの苦しさであった。

このような陸上交通のマヒ状況を背景に、沿岸・離島航路の旅客輸送力の強化を図ることを狙いとして、戦後間もないころに大量建造されたのが、いわゆる「小型客船二十八隻組」と呼ばれる客船群である。

国の主導により、敗戦翌年の一九四六（昭和二十一）年に船会社と造船所の間で建造契約が交わされ、三百総トン型から二千総トン型まで合計二十八隻（うち三隻は貨物船に計画変更）の貨客船が、敗戦直後の疲弊し切った経済と民生再建の期待をになつて颯爽と登場した。いってみれば「焼跡派客船群」とでも称すべきこの小型客船隊は、わが国の海運界、造船界がどん底の状態からはじめる最初の足掛かりともなつたのである。

戦後の民間客船の第一船として誕生

今回紹介する東海汽船の八丈島航路貨客船「黒潮丸」は、この「二十八隻組」の第一船として、一九四七（昭和二十二）年六月に播磨造船所で誕生した。単に「二十八隻組」の第一船というだけでなく、「黒潮丸」は、同じく六月に竣工した僚船「あけぼの丸」とともに、戦後建造された最初の民間客船として、海運史上にその名をとどめている。

戦後、わが国の商船隊はGHQ（米軍総司令部）の管理下に入り、厳しい建造制限を受けたが、国民生活上これだけは絶対に必要であるということで、客船界ではまず、国鉄の宇高連絡船と青函連絡船の新造が許され、続いて「二十八隻組」の建造に対しても、GHQのゴーサインが出たのである。

この年の七月四日、「黒潮丸」は、「あけぼの丸」とともに東京港に姿を見せ、関係者に披露された。四日付の朝日新聞に、「東京港の船旅に二隻の新造船が登場した。あけぼの丸（東京一大島一下田、三九九トン）、黒潮丸（東京一八丈島、五五〇トン）が四日、関係者招待会にクリーム色の船体をそろえて芝浦岸壁に現わした」（原文のまま）という記事がのっている。

小笠原の日本復帰の折に大活躍

写真を見れば分かるように「黒潮丸」は、貨物輸送に重点を置いた貨主客従の離島航路貨客船であった。船首寄りには大きな船倉があり、三トン・デリックで荷役を行つた。

船倉内には冷蔵倉が設けられており、生鮮食料品を島へ輸送することができた。そのため、当時の小型船にしては珍しく冷房設備があつたことも、特筆すべき点であろう。

就航以来二十年以上の長きにわたって、八丈島と本土を結ぶ離島生活航路をキープ。その間、十三年間に四十二回、気象庁定点観測所補給船として、東京一南鳥島間を往復。

一九五三（昭和二十八）年には、日本赤十字社のチャーターにより、中国人の遺骨輸送のため遠く天津へ航海するなど、五百トンの小型

船ながら立派な船歴を残している。

山田　迪生

その船歴の中でも特に光つているのは、一九六八（昭和四十三）年に小笠原が米国から返還されたおり、東京都のチャーター船として東京一父島間に就航し、復帰直後の貨客輸送に当たつたことである。「黒潮丸」は、小笠原定期航路客船の第一船でもあつたわけだ。その当時のことで、筆者に思い出がある。復帰直後、時の美濃部東京都知事が小笠原の高校生たちを東京に一週間招待したことがあり、都教委指導部の予算担当だった筆者がかれらの世話をしたのである。かれらは、復帰前はグアム島のハイスクールで全寮生活をおくつており、日本人というよりも米国人そのものといった感じで、苦労の多い仕事だった。生徒たちは、美濃部知事自ら引率してきたが、そのときの船が「黒潮丸」だった。思い出の「黒潮丸」は、一九七四（昭和四十九）年秋に引退、間もなく解体された。

戦後の八丈島航路、小笠原航路復活のパイオニアとして、その船名にふさわしい存分の活躍をしたのち、この名船はわれわれの視界から消え去つていった。

現在、八丈島歴史民俗資料館に、「黒潮丸」の船名標示板、航海灯、舶用時計、ドラなどなつかしい品々が展示されている。